

志木市こども計画策定のための ヒアリング調査結果報告書

I 調査の概要

- 調査の目的：本調査は、令和7年度から令和11年度を計画期間とする「志木市こども計画」策定にあたって、こども基本法に示される考え方に基づき、子ども・若者、子育て当事者の意見を計画に反映することができるよう、地域の子ども・若者を取り巻く現状や課題等を把握することを目的として実施しました。
- 調査対象者：市内で子ども・若者の居場所を運営している団体や教育・保育機関等で業務・活動を行う団体
- 調査期間：令和5年4月30日～5月17日
- 調査方法：郵送での調査票の配付、郵送での調査票の回収またはデータでの回答

配付数	回収数計	回収率
19 団体	15 団体	78.9%

Ⅱ 調査の結果

問1 貴団体等についてうかがいます。

省略(団体名称・代表者・記入者・事業内容をうかがっています)

団体のみうかがいます。

問2 貴団体は、どのくらいの頻度で活動を行っていますか。(単数回答)

「週3日以上」、「月1～2日程度」が5件と最も多くなっています。

選択肢	件数
週1～2日程度	1
週3日以上	5
月1～2日程度	5
年に数回程度	0
その他	2
無回答	2

団体のみうかがいます。

問3 貴団体が活動を行ううえで困っていることはどのようなことですか。(複数回答)

「スタッフの人材確保・育成(高齢化・性別の偏り・リーダーの育成など)」、「活動資金が足りない」が7件と最も多く、次いで「地域との協力・連携・協働について(支援を必要とする人へのアプローチなど)」が6件、「活動の場所(拠点)の確保が難しい」、「情報発信の仕組みづくりについて(市民への情報発信など)」が4件となっています。

選択肢	件数
スタッフの人材確保・育成(高齢化・性別の偏り・リーダーの育成など)	7
活動の内容について(マンネリ化・参加者が興味を持ってもらえる活動の実施など)	2
活動の場所(拠点)の確保が難しい	4
活動資金が足りない	7
活動に必要な情報や専門知識が不足している(適当な相談者がいない)	0
情報発信の仕組みづくりについて(市民への情報発信など)	4
地域との協力・連携・協働について(支援を必要とする人へのアプローチなど)	6
他団体等との協力・連携・協働について	1
特に困ったことはない	1
その他	1
無回答	1

全ての方にうかがいます。

問4 日頃、活動する中で子ども・若者や子育て世帯について気になることはありますか。
該当する項目番号を記入し、それについて内容を具体的に記入してください。(1
団体につき3件分の回答欄を掲載、項目は複数回答可)

気になる事例・問題として38件の回答がありました。項目の回答件数は以下のとおりです。複数
選択のため、項目の回答件数は意見の件数と一致しません。

項目	件数
1 保育所・教育施設について	7
2 遊びや体験の機会・居場所	9
3 心身の健康・医療	2
4 こどもの貧困	3
5 障がい児・者	6
6 虐待	3
7 ヤングケアラー	4
8 非行防止・犯罪等からの保護	2
9 不登校・ひきこもり	5
10 家庭教育・保護者や家庭の関わり	8
11 外国籍・外国ルーツの市民	6
12 相談体制	6
13 市のサービスについて	2
14 その他	1

【項目別 記述回答の具体的内容】

単数回答

項目	回答
保育所・教育施設について	保育料の減額や利用基準の緩和などを望む声が多数。
	幼児期に周りと同じことができないと不安になる大人が増え、それができるようにしてほしいと幼保、学校などに求める親が増えている。
遊びや体験の機会・居場所	継続的な、ゆっくりできる居場所がほしい。
	子育て支援センターに長らく予約の時代があり、利用者の減少があるのか人が集まりにくい。
	放課後志木っ子タイムのスペースが利用人数に対して不足している。
	子育て支援センターや乳幼児の遊び場の増設を希望する声が多数。

項目	回答
	竹とんぼやコマ回しなどをやったことがない子が多い。職場体験で工作をすると、とても集中して取り組むので、手を動かして遊ぶ体験をもっと提供したいと思う。
こどもの貧困	経済的に余裕がなく、習い事や塾に行けない子どもの放課後の居場所が少ない。
障害児・者	発達に不安がある子、ダウン症の子の対応・援助で気をつける事。
非行防止・犯罪等からの保護	日頃からの地域の協力体制強化・連携
	非行防止・犯罪などから子どもを守ろうとする意識が、子どもだけで自由にあそべる環境を少なくしている(大人の管理下であそぶことが多い)。
不登校・ひきこもり	不登校の子どもの保護者が気軽に相談できる場所が少ない。保護者自身もどう対応したら良いか困っている。
	関係機関に相談したが、悩みが解決していないといった相談を受ける機会があった。
外国籍・外国ルーツの市民	会話は大丈夫でも、書面での伝達が伝わらないと感じることがある。またコミュニケーションが上手くできていないのではと感じることがある。
	外国籍の子どもたちや、その保護者を支援する体制。
	言葉の問題・生活のちがひ
相談体制	生きづらさを抱える児童・生徒や保護者からの相談が増加しているので、関係各課とも積極的に連携を図っていきたい。
市のサービスについて	ファミリーサポート、リフレッシュ保育の充実、1歳児健診の実施を希望する世帯あり。
その他	子どもより高齢者が多い。どの世代でも、喜んで利用してくれる人がいれば、対象にしたい。

複数回答

項目	回答
保育所・教育施設について、家庭教育・保護者や家庭の関わり	地域の中に家庭でも学校でもない第三の居場所が必要。
保育所・教育施設について、遊びや体験の機会・居場所	転居して来た人たちが、情報を得るのが難しいとの声がある。
保育所・教育施設について、障がい児・者、外国籍・外国ルーツの市民	学習遅滞がみられる子どもたちへのきめ細かなサポートが充分でないため、二次障がいへと重症化する。
保育所・教育施設について、障がい児・者、相談体制	特別支援学級へ登校することで状態が落ち着いたように見える子がいるが、保護者は通常学級へ戻ることを希望している。
	クラスの中から取り残されないような工夫。精神障がい等のチェックが必要。
遊びや体験の機会・居場所、家庭教育・保護者や家庭の関わり	子どもたちの実体験の機会が減少している。また、子どもも大人も時間のない中で生活していることが多く、子どもが時間をかけて遊ぶことが少なくなっている。地域コミュニティの希薄化により、異年齢や地域の人とのつながりが減少し、家族単位で過ごすことが増えている。
	育休の親が、あれもこれもと色々な事を育休に詰め込み過ぎて、余裕が無くなっているように思える。
	親の過保護・過干渉・放任・自己中心的・過度な心配が増えていく中で、西原子育て支援センター閉所後の幸町地区の子育て支援の場の減少。
心身の健康・医療、ヤングケアラー	子どもは SOS が発信できない(支援が必要と思われたくない、恥ずかしさがある、支援の仕組みを知らない)。
心身の健康・医療、不登校・ひきこもり、家庭教育・保護者や家庭の関わり	不登校が長くなると、母親が行き詰って子どもの不安も強くなっていく。
こどもの貧困、家庭教育・保護者や家庭の関わり	家庭環境が全ての始まり。
こどもの貧困、虐待、ヤングケアラー	“暴力”ではなく“言葉”や“ネグレクト”など、行政がかかわりにくいケースは放置される。
障がい児・者、相談体制	発達に不安のある子の保護者が相談できる場所を求めている。
障がい児・者、不登校・ひきこもり、外国籍・外国ルーツの市民	生きづらさを抱える児童・生徒とその保護者や教員からの相談が増加している。
虐待、家庭教育・保護者や家庭の関わり	子どもに過度に干渉する保護者がいる。子どもの自由な選択や自主性を尊重することができず、全てを管理しようとする保護者がたまにいる。育児に悩みや疲れを感じている保護者を見かけることがある。

項目	回答
虐待, 相談体制	親に手を上げられると話す子や、体にアザがある子を見かけたことがある。安心して話をするができる関係を保つことと、通報や関係機関に報告するタイミングの見極めがむずかしい。
ヤングケアラー, 外国籍・外国ルーツの市民	外国籍の子どもは集団(保育園・幼稚園・小学校等)で友だちもでき、日本語も話せるようになるが、保護者が母国語しか話せず、コミュニケーションがとりづらく孤立している。子どもが日本語の通訳になっている。
ヤングケアラー, 不登校・ひきこもり	ヤングケアラーの小学生の子があまり学校に行けていないようで、社会的な成長課程の経験不足が心配である。
家庭教育・保護者や家庭の関わり, 相談体制, 市のサービスについて	ひとり親で子どもの育て方や人との関わりについて悩んでいる人がいる。また、学校や相談機関への不信感もあるようだ。

問5～6は、可能な限り日頃ご支援にあたっている子ども・若者のご意見を踏まえてお答えください。

問5 子ども・若者が安心して過ごせる居場所には、どのような視点・機能が必要だと思いますか。(自由記述)

本読みや宿題をするなど、一人一人が安心して過ごせるスペースや空間の確保。また、信頼がおける身近な大人がいるという視点。子ども・若者が悩みを言えるだけでなく、支援者側から気が付いて声をかけられる関係性。
プライバシーを尊重し、集団行動を無理強いしない。専門機関と速やかに連携がとれること。
小学生は学校終了後宿題や友達と話ができる場所、志木っ子、学童があるので安心。
日常に溶け込んだ形での見守り機能と個人情報の取り扱いが徹底された体制
子ども・若者の気持ち、行動を無条件に受け入れてくれるという安心感のある雰囲気、環境
人材育成(リードしてゆく人の)
世代にもよるが、話を聞いてくれること。
こども・若者一人ひとりの特性・個性を理解し、その場に関わるすべての人(子ども・若者・保護者等)をコーディネートできる人が必要不可欠。日頃から子ども・若者たちと接していて、子ども・若者と“顔の見える関係”になっている人であることが大切。そういった“新しいカタチの専門職”をスクールカウンセラーに配置することが喫緊の課題。
できるだけ大人が手出し口出しをせず、禁止事項が少ない、好きなことができる居場所。みんなが等しく同じことをしなくてもいい、子どもの個性を認められる居場所。大人が用意するものばかりでなく、子ども自身が考えてつくる居場所。子どもだけで行ける、一人でもいられる居場所。

だれでも来ていいんだよ、の発信が大切で、居場所側が来る子を選別しない。居場所に来ることはほんの第一歩であるので、来た子に対して受け入れの気持ちを(さりげなく・自然に)表せる場所でありたい。自分だけを見てほしい、という子には、他の子と平等に接するスタンスを保ちながらも、特に気をかけてあげるなどの配慮も持ってあげたい。
親などの大人の顔色を伺う必要がなく、自由にふるまえる環境。無理に周囲の子と仲良くさせる必要はなく、ひとりでも気にせず過ごせる場所が大切だと感じる。
これから暑い季節を迎えるにあたり、自宅以外で遊べる場所(室内)がある程度必要。夏休みの幼稚園児など、公園は暑くて遊ばず、ずっと自宅では互いにきついと思う。水遊び場も小学生が多く遊びにくいので、時に暑い季節を家計に負担のない、無料で遊べる所がほしい。
子どもの本音が出せるような工夫が必要。子どもや若者の興味関心があることができる環境。子どもと一緒に居場所のルール作り(子ども会議)など参画する仕組み。子どもの自主性を信じて待つ(急がない・急がせない・焦らせない)。
なんの視点も機能もないところ(特に、視線を感じない様に工夫)が良いと思う。

問6 悩みや不安を抱える子ども・若者が相談しやすくなるために工夫すべきと感じることについて、「身近な大人が工夫すべきこと」と「専門機関(発達・心身の健康・暴力被害・ひきこもり・非行等の支援に関すること)が工夫すべきこと」の2つの視点でお答えください。(自由記述)

【身近な大人が工夫すべきこと】

遊びやスポーツ、趣味などの活動などを共にして、仲間意識を培っていく
子どもの様子を気にかける。適切な声かけ。
日常における何気ない声掛け、見守り
“支援者”ではなく“伴走者”であると自覚すること
目線を合わせて、相談にのる。
いつでも相談しやすい雰囲気の家(ファーストプレイス)・学校(セカンドプレイス)で関わっている身近な大人たちが作ることだと思いますし、そこでは解決できないことで不登校・ひきこもりへと繋がっていくならば、サードプレイスに相談しやすい状況を作るのが重要と思う。
大人が思う価値観を子どもに押し付けない、子どもの意見をきちんと受け止め、否定しない。一人一人の個性を大事にする。
居場所に来たからといって、質問や聞き出すことはしない。その子が話してくることに心を開いて聞き、その子の現在の生活を想像してみる。子どもの話を短絡的にとらないで、しかし表情に気をつけて聞き、また複数の大人で聞くようにする。何度か通ってくる中でのお互いの関係作りを慎重に、かつ明るくとらえると、より話しやすくなると考える。
子どもの意見を聞き、尊重すること。勝手な判断で親や学校に情報を共有しないこと(秘密を守る)。

学校でつまづいている時など、それ以外のコミュニティがあると良いと思う。気軽に参加しやすい、サークルや団体、例えば、世田谷の羽根木公園の中にあるプレイパークのように、放課後も開いているプレイパークのような所。
顔見知りを増やす。悩みや不安を抱えている子どもを特別扱いせずに普通に接する。ありのままを受入れる。信頼できる大人と思ってもらえるように本気で向き合う。
目線を合わせる(上から物を言わず、自らの身の丈で寄り添う)ことが大事だと思う。

【専門機関が工夫すべきこと】

相談するというハードルを下げるために、専門機関に相談するという抵抗感を減らしていく工夫があってもいいのではないかなと思う。
当事者と専門機関をつなぐための、地域との連携。
現場で活動する団体との日頃からの連携。本人の意志を尊重した支援。
困った時にいつでも相談できるように、土・日・祝日の対応可能な環境をつくる。
先生と言う立場で上から目線では、素直になれない。
“顔の見える関係性を持つひと”を、学校現場(スクールカウンセラー等)に配置＝採用していくことが今の時代には必要不可欠と思う。職員を配置するにはいろいろなルールがあるが、時代に合わせて変えていく時期とも思う。
悩みを抱えている子どもは周囲の目が気になり、相談に行きにくい場合が多い。悩みや不安の種が小さいうちに相談できる環境づくりが大切。子どもの居場所、子どものあそび場に相談員がいるといい(相談員が相談員であることを名乗らない)。
専門機関としての役割を果たす場所のひとりとして、専門知識を持つことと、人との関わりへの専門的スキルを磨くことを日々行っていくことが必要。ここへ相談に来た人の気持ちを無にしない。たらい回しにされたとの声も聞くのでそれを避ける。
子どものあるべき姿(理想)を大人が決めてしまい、そこへ導こうとするのは良くないと思っている。子どもの権利を何より優先すべき。
気軽に参加しやすい学校以外のコミュニティがあり、そこに常に数名のスタッフがおり、小～高までの子ども達が自由に入れる所があれば、新たな友達(学校・部活以外)や学校の友達も違うつながりができ、もっと話しやすくなるのではと思う。
他人と比較せずにその子の成長のペースに合わせた支援をする。専門機関同士の情報交換や連携。
他の事例に当てはめないほうが良いと思う。

問7 活動する中で子ども・若者からの相談や提案を聞く際に工夫していることがあれば教えてください。(自由記述)

なんでも相談箱を設置している。職員に直接言えない、周りの目が気になる子でも、なんでも相談箱なら悩みや困りごとを書いて入れられることが多い。
先入観にとらわれない。否定的な言葉を使わない。
子どもと歩きながら、自然にふれながら、学校、ご家族の話などをするようにしている。
子どもや若者がどう考えているか、何をしたいかという希望を聞き、うまく言葉にできない場合には選択肢を提示する等の工夫。
対象者に関心がある。最小限の言葉で質問して、最小限の言葉でかえす。
注意からするのではなく、まずは対象者が興味のあることから話し、ある程度リラックスしてから本題へ。
①「こどもの気持ち(感性)になって聞く」ことを一番大切にしている。それが出来ているようで出来ない(すぐ大人の都合で聞く・話す)ことが、子どもや若者の“心離れ”につながっているのだと思う。
②「いつでも話しやすい」ように、“いつもヒマそう(に見えるよう)”にしている。
子どもの意見を否定せず受け止める、聞く耳をもつ。一緒に遊び合える大人は信頼度が増す。子どものつぶやきを大切にする。
「負」のことは使わない。～しないで、～はだめ、なんで～なの、～すればよかったのに、～できないの、などは決して言わない、「プラス」の助言を心がける。「学校行きなよ」→「行って給食食べてみたら？」等。答えが笑顔になる(であろう)声かけをする。笑いはとても大事。
守れない約束はしない。でも努力すると伝える。結果を報告する。名札をつけておく(ひらがな)
相手の話をよく聴く。色々な話をする場合は優先順位や何に一番困っているかを聞く。その時の気持ち(感情)も確認するように心掛けている。
相談には正面から向き合い、提案は、まず、どうすれば実現できるか考える。

問8 そのほか、志木市の子ども・若者施策、子育て支援において感じる課題や今後必要だと思うことがありましたらお書きください。(自由記述)

全ての町内会館の「子ども食堂」への活用を①ノウハウ②人材の仲介(③必要なら財政支援)を提供することで実現すること
何を何処の窓口で相談したらよいのか、わかりやすくする。“横のつながり”を重視する。
子どもやその世帯に関する課題は複雑で潜在的なものが多いように感じるため、様々な機関や居場所の運営者・大人が小さな変化に注意を払うといった意識づけが必要。
不登校などの問題を抱えている家族が、仕事が休みの土・日に相談できる専門機関をつくってほしい。家族の中に入って、家族間にすきまを作るような支援を考案してほしい。
本当にこまっている子を助けたいと思っても、わからない。市で把握している中で、民間で少しでもヘルプできることがあれば、協力していく組織を作っていきたい。
悩んでいる人は、自分から来ないので、どうすれば相談に来てくれるかが問題。
①カウンセラーの評価(相談したことで不登校⇒登校するようになったなど)はしているのか。 ②年度会計職員などで、カウンセラー等を加配する際に、「サードプレイスを地域で実践しているひと」をカウンセラーとして配置することで、学校での相談支援と地域での回復(立ち直り)支援の相乗効果が見込まれると思う。地域・保護者のニーズもあると思う。
幼児期の子ども自らが好奇心をもって取り組めるあそび体験や、バーチャルな世界ではない生の舞台鑑賞の機会(子どもの文化体験)が、子どもたちの豊かな心を育て、自己肯定感を高める。このことは国や大学の先生たちの研究で実証済みだが、それを知る大人が少ない。また、あそびの中で育つ感性や表現力、コミュニケーション能力の力をもっと大人が大事にできるよう、子どもに本当に必要なことを考える大人の学びの場を増やしてほしい。それが実践できる場をつくるために、市民団体と協働したり、その活動に対する助成事業があるといい。
学校で子どもに関わるボランティア等に対し、研修か、それが難しければ紙一枚のボランティア心得が必要かと考える。お互いの事故防止にも少しは結びつくのではないか。
市のHPにあるステップルームの説明を見直してほしい。多様な学びの機会の提供より復学ありきのスタンスになっている。
地域の人とのつながりだけでなく、郷工芸能団体の活動を利用して中高生の横のつながりがもてれば、それも一つの支援になると考える。
中学生にヤングケアラーアンケートを実施していたが、アンケートには本当の事は書かない(書けない)、SOSが発信できない子どもへのアプローチが必要。自分がヤングケアラーだという認識が無い(その生活が当たり前)ので、周知の工夫や埼玉県ヤングケアラーチャンネル(公式LINE)等の活用をすると良い。また不登校やヤングケアラーの経験談を聞く機会があると支援する側にも当事者にも良い刺激になると思う。
当団体では、事業の性質上、恵まれた子ども、また、熱心な親の参加が多いので、事業で学んだ内容を、参加者から地域へと広げていただくよう促している。